
噴水前には、こども達

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噴水前には、じども達

【ZPDF】

Z0592C

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

噴水前にはじども達がいて、パパとママもいて、迷子になつた女の子と男の子がいて、そして、そこには七色の虹ができていた。

大都会東京、あつちを見てもこつちを見ても人がいる。こんな所で迷子になつたりしたら大変だ。

「あれ。ママ何処に行つたんだろ?」

「この噴水の前で待つてるつて言つてたのに、どうしよう……」

女の子が喋り男の子が泣きそうな声で喋る。二人は兄妹なのか、幼なじみなのか、お友達なのか、カップルなのか、まだそんな事はワカラナイ。

「はあ……つたく面倒臭い。迷子のお呼び出しをしなくちゃイケないじゃん」

普通はこどもが呼び出されるんだが、ビーツやら女の子はママを呼び出したいらしい。

「ママ何処に行つたの」

瞳をウルウルさせてくる男の子は、俯いている。

噴水からは勢い良く水が吹き出でいて、そこに今は七色の虹ができていた。右の方から

「きれい~」という声が聞こえてきた。女の子は何なのよと小さな声で言い、振り向いた。

「何だ虹か。これぐらいではしゃぐなよ

「じどらしからぬ言葉の後、先程声がした方へ向ぐ。そこにいたのは、日傘を指しているキレイなお母さんとキラキラ日を輝かせて噴水にできた虹を見ている男の子。お母さんは

「そろそろ行くわよ」と言つたが、男の子は

「イヤだイヤだ! 虹見る!」と言つて地団駄を踏んだ。するとお

母さんは

「あらそ、なら一生そこで虹を見とおなさい」と怒鳴り散らし男の子を置いて歩きだした。

「怒りすぎだよあの母さん。あれじゃあの子がかわいそう」
強気な女の子は溜息を付き、ストレス溜まつてもじぶんに当たるの間違ってる、と付け足した。

男の子はお母さんのその言葉に驚き走りだす。石畳の地面に靴音を鳴り響かせ

「待ってよお母さん！」と、百メートルぐら^レ離れたお母さんに呼び掛ける。しかしそのまま前に進むお母さんは、徐々に足早になってしまふ。必死に追い付こうとする男の子だが、靴ひもが解けて転げてしまつた。ドサッ、といふ音がしてお母さんは足を止めた。ひざが赤くなつていて痛そうだが歯を食い縛つて我慢している男の子は「言つ事聞くから待つて！」と叫ぶ。その声が届いてこっちへ来ると思ったが、お母さんは早歩きで男の子から遠ざかり、そして見えなくなつた。

「えつ、コレ想定外だよ。私でもビックリ」

無理矢理笑つたような顔をしながら、お母さんに置いていかれた
男の子に近寄る女の子。

あのひはんやうに手でるんだ」と僕は、「

「余計なお世話だ」

男の子はぶつきらぼうにそう言いながらも、はんとうじうを傷口にはりハンカチで涙を拭う。

「交番に行つて捜してもいいぢやないか。私のママも何処かに行つてしまつたからね」

あつちの方を見ながら男の子に手を差し伸べる。

「気持ちだけもらつておへよ、僕はガキじゃないからね」

「そうですか」

さつき駄々を捏ねていたお子様はどなた様かしらね、と一人「」と。

二人は泣いている男の子を見て、女の子は舌打ち男の子は大丈夫かと話し掛ける。泣き虫男の子は、

「大丈夫だったら泣かないよー。ママー」

泣き叫ぶ。

「お前はそれでも男か？ 情けないな」

「それは言いすぎだよ。お母さんがいなかつたから不安になるんだから……」

「あつ、ごめん。先程あんな事あつたのに」

頭を下げる。

「そんな事よりこの泣き虫は君の何？ 彼氏とか？」

「まさか。『イツは私の弟、因みに特技は泣く事』

「カワイイソウだね弟君。こんながお姉ちゃんで」

男の子が頭を軽く叩かれ、弟が笑つた。やつと泣き止んだのか、と女の子は安堵の胸をなでおろす。その時

「お父さんゴメンなさいー。妹に優しくするから行かないでー！」

「ゲームいらない、お菓子いらない、おもちゃいらない……欲張らない」

「僕は悪い子なんかじゃないよー。良い子だよー。」

「申し訳ございません、申し訳ございません」

右からも左からも「」の叫び声。皆田を真つ赤にしている。

「なにコレ？」

「僕と同じだ、僕と……」

「その台詞は聞き飽きた。お前は一向に優しくしない、自分が良いければそれで良いと思っている。」
「うこうのなんて言うか知ってるか？」

「自己中だよ」

「じゃあお前は何もかもいらいのかな？ そう捉えて良いんだよね。アハ、私達もいらないって事なの？ 貴方のお望み通りさせたと田の前から消えてあげるわよ」

「普通自分で言うかな。例えば誰かを殺しちゃった人が一部始終を目撃されていて、僕は殺人者じゃないとか言うか？ こんなのが怪しいよな、スッゴク怪しいよな。だからお前も怪しいんだよ、良い子なんて自分で言うからさ」

「謝れば許してくれるって思っちゃいけない。あの人を襲っちゃいましたスミマセン、あいつ気に入らないから海の藻屑にしましたスミマセン、謝つて済んだから社会がおかしくなる」

5

そして子を置き去りにして歩く。邪魔をされたら振り払い、蹴飛ばし、殴り、容赦なく攻撃する親。空はどんどんより曇り空、雨でも降つてきそうな感じ。

「ど、どうなつてるの」

「胸が痛い……」

「ああ、あああ、ああ」

呆気にとらわれる女の子、胸を擦る男の子、目を見開き唸る弟。三人の後ろでは噴水が間抜けに虹を作っている。

「きっと夢よ、いっぺんにこんなアリエナイし」

「冷静になればそう思えるのかもしれないけど、皆はどうなのかな？」

？」

「あああ、あああああ

女の子は右側を、男の子は左側にいるごども達の様子を見に走る。
弟がこんな状態なのに、一人は気付かない。

「ハハハ、捨てられちゃった。超ウケる、腹いてー」

何故笑えるんだ、何故悲しまないんだ。

「やつとウルサイ奴等から解放された。これで誰にも文句を言われ
ない、ああ嬉しいな」

何故邪魔者扱いをする、何故嬉しいんだ。

「どう? こっちは全員黙日」

「同じく」

女の子は肩を落とし男の子は噴水の虹を見る。

「アイツが優しいお姉様をお待ちかもしないから、さっさと行く
ぞ」

「う、うん」

弟は水遊びをしていた。髪の毛、服、ズボンを濡らし一人で遊んでいる。

「何してんの? 着替えとかないのに」

女の子は呆れている。そして今直ぐ水遊びをやめさせようと、靴を脱ぎ靴下も脱ぎ噴水に入る。

「タオルもドライヤーもないし、風邪ひくからやめようね」

弟の右手を掴み、引っ張る。女の子はそのまま噴水から弟を出し、あんたは何やってんのよと怒る。

「何つて、さいごだから遊んでるんだよ。一人も遊びなよ? 生まれ変わる前に遊ばないと後悔するよ

「はあ?」

女の子は弟が言っている事がよく分からなく首を傾げた。男の子は、黙つて弟を見ている。

「さつきね、二人は気付いてなかつたけど、僕唸つてたんだ。その

時ね、真つ暗な世界をさまよっている僕に話しかけてきたのは、ママで、お父さんとお母さんは階段を上った先でこども達を待っている、と教えてくれたんだ」

嬉しそうな声。言い終わると立ち上がり、笑顔で歩く。周囲にいるこども達も次々に立ち上がり、弟の後に続く。

「ああ、皆、良い子だからこひへおいで。

何処からともなく聞こえるその声は、とても穏やかで物静かな声だった。

「ちよっと晒！ 冷静にならうよ！」

女の子は頭を止めようと声を張り上げる。

「さっきのアレは何だったの、この声は幻聴よ！」

「こども達が進む先には、天へと延びる光り輝く階段が出来ていた。

私達と一緒にきましょ。手を繋ぐから恐くない、安心して。

歩のスピードが早くなるこども達。女の子は弟だけでも助けようと、先頭を歩く弟へと全速力で走る。その時男の子は手で顔を隠し、涙を流していた。

「止まれ！ お姉ちゃんの言つ事が聞けないのか？」

睨み、怒鳴る。弟は怯まずに階段を手指す。

「止まれって言つてんだろ！」

肩を掴み停止させた。他のこども達が響かせる足音だけが聞こえる中、弟はゆっくりと口を開いた。

「お姉ちゃんはまだワカラナイの？ ジヤあ教えてあげるよ。この階段を上ればママに会えて天国に逝ける、上らなかつたら田を覚まして生きる

他のこども達が二人を囲む。男の子は皆から少し離れ、噴水の方を見ながら歩いていく。

「それが本當だとしたらここは何処なの？」

「ここは、天国と現世を繋ぐボーダーラインだよ。僕達のように未来るこどもや社会的に死んでは駄目な人や運が良い人が、ここに流れ着き生きるか死ぬかを決める」

「……じゃあ何で」

女の子は自分を囲むこども達を見回す。

「それぞれ事情は異なるだらうけど、皆死にたいと思つたからだよ。僕はママがないと淋しいから、逝くんだけどね」

「そんな命を粗末にする事言つて……」

握りこぶし。女の子は弟を殴るのだろうか？

「やめときなよ。君に彼の主張をどうこう言つ権利はない」

男の子は皆に追い付き、女の子の腹部を思い切り殴つた。弟は、

さようなら、と座り込む女の子に言い捨て階段を上る。

「どう……して……」

お腹を押さえ苦しそう。男の子は、女の子の耳元で何かを話した。

言い終わると男の子は、

「皆はもう逝つちゃったね。僕もそろそろ階段上るけど、君はどうする？」

優しい笑顔で話しつけ、お腹、口メンねと謝る。

「そんな……」

「こどもは親がないと生きていけないから。一人じゃ孤独だし」

「死ぬなんて逃げてると同じだよ」

「最期に見た虹はキレイだった。今度はママとゆっくり見よう、大好きなママと一緒に」

「ハハハ、ハハハハ」

女の子は突然不気味に笑いだした。その姿を見た男の子は、ぱいぱいと手を振り光り輝く階段に足を乗せた。靴音は静かに響き、少しして聞こえなくなった。

独り地べたに座り込む女の子は、息がのどに詰まるような声を出して泣いている。噴水にあつた七色の大きな弓形のおびは、跡形も無く消えていた。

「ホントだ、皆死んでる。ピクリとも動かない」

ガードレールを飛び越し林の中に落ちた観光バスは、血を流した大人や子どもがぐつたりしていた。女の子は交通事故から一人助かり、その死体だらけのバスで笑っていた。

「アハハハ、心臓脈打つてねーぞ身体冷たいぞー」

足で寝転がつている子どもの頭を蹴り馬鹿笑いをする。バスから五百メートル離れた地点では、警察が懐中電灯を頼りにバスを捜していた。空からはヘリコプターが捜している。

「早く保護してくれよ、お腹空いたからさ」

顔面へ踵を振り落とす。嫌な音がして、靴は真っ赤な液体で汚れた。

「お姉ちゃんに逆らつた罰だよ。潰してやつた、アハハハ、案外簡単」

呵呵大笑する少女の隣で冷たくなっている大人の膝の上には、自殺計画と書かれた冊子が置いてあつた。

「私が間違つていたの？ 何故皆死んで、私だけが生きてるの」
警察犬が吠えた、走つた。後を追う警察官は必死。

「一人は淋しいよ。でも、生きていたら何時かきっと良い事あるかな？」

バスからは女の子の泣き声が聞こえた。

(後書き)

童話として書いていたなんですが、ジャンルをその他にかえました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0592c/>

噴水前には、こども達

2010年10月8日15時51分発行